別記様式第３号

# 学　位　論　文　要　旨

氏　名　　竹　井　　秀　文

題　目　未来志向の道徳授業の開発と実践
－プラグマティズムを基軸に心理学的アプローチを活用して－

本研究は、児童一人一人が未来へ向けて、よりよい生き方を志向できる道徳教育の創造を目的とした。そのため、令和の日本型教育に向けて、主体的で対話的で深い学びを発展しつつ、どう生きるのかを探究していく未来志向の道徳授業を開発・実践した。研究手順として、まず、道徳教育、道徳授業の問題を述べ、研究の方針を明確にした。そして、未来志向の道徳授業の基盤となる研究理論として、プラグマティズムに視点を当てる。特に、問題解決的な道徳授業のベース理論となっているデューイのプラグマティズムと関連させる。問題解決的な道徳授業は、将来における道徳的実践力を育成することに力点を置くため、日常生活と結びつけて考えることができる点に強みがある。そのような点を活用した未来志向の道徳授業は、理想の未来を構想して、その実現を目指す中で、よりよく生きる力を身につけることを目的として開発した。つまり、未来志向の道徳授業は、児童が自ら道徳的問題の状況に直面し、分析するなかで具体的な課題を見出し、解決志向させる。そして、未来に向けて様々な解決策を構想し、吟味したうえでポジティブに実行していこうとする意欲を高める道徳指導法なのである。

本論Ⅰ部では、未来志向の道徳授業における研究理論と実践開発について論じた。まず、第１章では、プラグマティズムを活用した道徳授業を実践開発して、未来を思考できる教材開発及び発問の工夫による授業改善を図り、授業の実際から考察した。デューイの授業実践を追試することで、プラグマティズムが本研究のベース理論となっていることを確認できた。次に、第２章では、アルバート・エリスの論理療法である「ＡＢＣＤＥ理論」を活用した道徳授業を実践開発して、授業の実際から考察した。ＡからＥまでの利点を考慮して、指導過程の独自性に焦点を当て、教材分析に注力し、未来の自分の生き方に効果のある学びを実現することができた。さらに、第３章では、ポジティブ心理学を活用した道徳授業を実践開発した。ここでは、セリグマンが提唱した幸福理論を活用した。具体的には、自分の強みを見つけ活用する学習や人生の意味・意義を自覚させる学習を実践開発し、ポジティブ感情が発生・起因する自分の道徳的強みを見つけ、それを未来へ向けて、どのように活用させて生きていくか考えることができた。そして、第４章では、解決志向ブリーフセラピーを活用した道徳授業を開発した。ここでは、顕在化された問題に対して、解決像・未来像を描いたり、解決像・未来像に必要なリソースを見つけたりして、未来に向けて自分ができることを考えさせた。いずれの章においても、それぞれの研究理論を基にした授業理論と実践開発を往還させて、授業実践及び授業考察まで行い、その有用性・可能性を示すことができた。

本論Ⅱ部では、本論Ⅰ部で述べてきた心理学的アプローチによる未来志向の道徳授業の成果を考察した。特に、授業前と授業後の児童の実態に注目し、未来志向道徳アンケートを実施し、その変容に注目した。さらには、アンケート結果の変化について統計的手法（マクネマー検定）を用いて、検証した。その結果、質問項目 11 の「将来の夢や目標はありますか」が全学年において「有意差あり」という結果となった。これは、未来志向の道徳授業の特徴である「未来に向けてどう生きるか」について、深く考えさせたことが要因である。具体的には、自分の将来、未来の人生、未来のよりよい社会生活、地球の未来などを自分たちの幸せの実現と関連させ、熟考させる授業が構築できた。

未来志向の道徳授業には、児童の幸福と将来の行動、未来にどう影響するのかを探究できるよさがあった。そして、未来を強く意識した生き方について他者と協働してこれからどう生きるか、社会にどう貢献するのかを考え、自分の人生を主体的に創造できた点が成果である。一方、課題は、開発実践における検証の限界性である。児童のよりよく生きる姿が、未来志向の道徳授業によるものなのか検証が曖昧である。よって、質的研究に留まらず、量的研究も取り入れ、混合研究法を活用して、継続研究を試みたい。さらに、児童自らがよりよい学び手となれる道徳授業へと強化したい。そのため、未来の生き方に目を向けて、自分の理想像や将来像をイメージさせ、何ができるのかを考えていく学びによって、道徳科における資質・能力をさらに高めていくことを課題としたい。

以上のような限界を突破することによって、課題を克服し、未来へ向けた生き方を捉える学びの実現を目指している。

本研究は、「児童が自らの幸せな未来つくっていける」次世代型道徳教育の構築を目指している。そのため、すべての児童の可能性を引き出し、道徳科としての資質・能力の育成を狙っていきたい。児童の目を未来に向けさせること、未来への希望をもたせること、それが、本研究の使命である。そして、すべての人を幸せにできる教育的営みとなる研究であることを最後に付け加えたい。